



■ビオトープ・サロン 2020年徳島の未来に向けて…みんなの思いを組織の使命に！ No.1

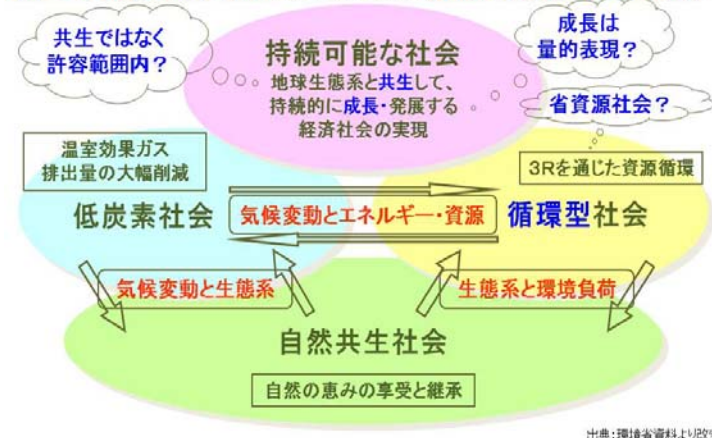
今号から数回にわたって、会員の未来への思いや願いを紹介いたします。一昨年の2010年3月、当会の設立5周年を記念して、「2020年徳島の未来に向けて～五年間の歩み～」と題した活動記録集を刊行しました。この中に編集した「みんなの思いを組織の使命に！」というページから、会員のそれぞれの思いを転載します。ニュースという名にはふさわしくありませんが、2020年の徳島の未来への思いとしてお伝えします。（編集部）

【明るい未来の徳島づくりの為に何を指すか】

記者：新開善二（会員）

持続可能な社会とは？

持続可能な開発：生態系の資源再生能力と廃棄物吸収能力を、将来にわたって、超えないような経済系の発展。（発展とは質的向上の意味）



出典：環境省資料より改変

最近、ESDという言葉を知りたり、見かけたりすることが多くなりました。

「持続可能な開発のための教育」という意味を表しています。今迄、国の経済を成長させ、GNPをあげることが、人々の生活を豊にすることであり、人類全体の幸福に繋がるということ、経済の発展は善だと何よりも優先されてきました。

しかし、人間の存在は、本来、地球の循環するエコシステムの一部であり、私たちの生存は、水や空気や様々な生物たちとの有機的な関連性の中で成り立っています。無限の経済成長を求める余り、私たちは地球の生態系に大きな負荷をかけています。今の経済と社会のあり方を変えて行かないと将来世代に大きな犠牲を強いることになります。これからの持続可能な社会づくりの観点より開発のあり方を学ぼう、その為の人づくりをしようというのがESDです。

ESDは、これからの社会を考える際の手法ということでもあり、いくつかの視点があります。そんな思いで、私たちの地元徳島を見るときに、即ち持続可能な徳島を考えることは、生態系に負荷をかけないように環境との調和を考えながら、まちづくりに取り組むということに他なりません。

私たちの日常は、エネルギーの使用で成り立っていますが、まず、これを自然エネルギーに変える、CO2を一杯吐き出す車前提の街づくりから抜け出す、排出物のない暮らしに変える、CO2を吸収する街の緑化に取り組む等が主な課題になります。このような課題にむけて出来ることから、すこしずつ取り組むことにはなりますが、持続可能とはどういうことか、何をやるのか、ESDという視点にたって考えることで、ESDの手法を学習することが必要です。

その中で、必然のことですが、どうしても生態系とか生物多様性を守るということからは、常に目を離すわけには行きません。これからのまちづくりにこれらの専門家集団である当会は、まちづくりのシンクタンクの機能を持ち合わせた団体として無くてはならない存在です。社会の期待に応じられるよう組織の充実、各人のスキルアップ等切磋琢磨しようではありませんか。（「2020年徳島の未来に向けて～五年間の歩み～」2010年3月より転載）

【「あるもの探し」の生態系保全活動、参加者みんなの元気とチームワークで！】

記者：土井伸一郎（会員）

中山間地域の荒廃は、人間と野生哺乳類との関係にも歪みを生じさせています。

平成に入ってから徳島県では、主にシカ、イノシシによる農林業被害が増大し続けており、特にシカは豊かな原生自然の残った高標高地の植生まで食害を始め、剣山や三嶺に於いても早急に対策を講じなければ表土流出や山腹崩壊の危険性が指摘されるに至りました。

これらの被害を抑制するには、人間と野生動物との適度な緊張関係が必要です。そして、適度な緊張関係を保つには、その水際線である中山間地域が元気でなければならぬと強く感じるようになりました。

都市部の人と中山間地域の人とが共通認識の下、それぞれの知恵と力（できること）を持ち寄って、中山間地域を元気にする活動を上げよう！

- 生態系サービス（産物）の掘り起こし、再発見
- 生態系サービス（産物）の商品化の検討
- 生態系サービス（産物）を脅かす外来生物の排除

（「2020年徳島の未来に向けて～五年間の歩み～」2010年3月より転載）



■ビオトープ・セミナー 資格試験に挑戦して基礎知識を修得しよう!

ビオトープ管理士資格試験過去問題 出展：(財)日本生態系協会主催「ビオトープ管理士セミナー」のテキストより
無断転載禁止：本紙は公益財団法人日本生態系協会の許可を得て転載しています。(編集局)

【ビオトープ論：正答と解説は次号で紹介】

問043：生物多様性の保全に関する次の記述のうち、正しいものはどれか選びなさい。

1. 種の多様性を保全するためには、希少種の保護が最重要であるため、それ以外の種の保護は当面必要としない。
2. 遺伝子の多様性を取り戻すためには、東北のメダカと九州のメダカを交雑させる取組も必要である。
3. 生態系の多様性を保全するためには、森林よりも草原の方が生物の種が豊富なので、草原の保護を優先すべき。
4. 景観の多様性を保全するためには、単調な景観の原生自然に手を加えて変化を付けた方がよい。
5. 原始的な自然の保護だけでなく、二次的な自然の保全も、生態系を維持していくために重要である。

■前号042の解説

①食性とは、動物の食物に関する性質のことで、その種類や食べ方は動物の種によって異なり、非常に多様である。
 ②生態的地位とは、一つの種が利用する、あるまとまった範囲の環境要因のことで、ニッチ(Niche)という。③繁殖地とは、動物の生息地のうち、特に繁殖期に利用する場所。④採餌地とは、動物の生息地のうち、特に採餌(餌をとること)に利用する場所。⑤ねぐらとは、動物の生息地のうち、眠るときに利用する場所で、特に鳥類が夜眠る場所に用いることが多い。以上のいずれも種によって異なり、一定の環境条件を備えた定められた場所が多い。

※2級はどなたでも受験でき、四国の受験会場は「徳島大学工学部」です。受験申込みは**8月10日(金)**まで。試験日は**9月30日(日)**です。詳しくは、<http://www.ecosys.or.jp/eco-japan/activity/biokan/index.htm>

■ビオトープ・サロン 熱血オジサン奮闘記! ~フログビオトープ気延の里~

寄稿：石井町のわんぱくおじさん(ビオトープ気延の里)

【~京都府立植物園~ 5月31日】



5月31日 曇り 京都で18:00からの会があり、バスの時間の都合で3時間ほどの余裕ができたので府立植物園へ。一人でゆっくりと散策しました。広大な中は、温室あり、西洋庭園(丁度バラが満開でした)あり、竹林あり、菖蒲園ありその他多くの植物が丁寧な管理下に育っていました。

で、この植物園の中を流れる小川にふと目をやるとシジミの貝殻が。以前、やはり京都のどこだったか有名な庭園の中の小川でシジミの群生を見たのもしやと思って。手を入れて探してみると、いるわいるわ。前述の庭園は琵琶湖のみずを引いているって言ってたんですが、丁度管理人の方がいたのでこの水はどこからですか、シジミがたくさんいますがタイワンシジミですかの問いに、水は賀茂川から、シジミはヤマトシジミではとの答えでした。?????。(編集局から一言…ヤマトシジミ：汽水/マシジミ：淡水/セタシジミ：琵琶湖固有種)

■ビオトープ・サロン お便りコーナー

河川堤防の特定外来種の駆除で在来種も消えた…と嘆かれている読者とのメール通信から、抜粋しての話題提供です。外来種と在来種と身近な自然の生物多様性…皆さん、一緒に考えてみましょう! (編集局)

【特定外来種の駆除で在来種も消えた! : Sさん】

オオハンゴンソウをネットで検索してみました。私が川島の土手で見たのは、アラゲハンゴンソウのように思います。葉が違います。今となっては、オオハンゴンソウもあったかどうかは、花が数キロに続いていて全部は見えていないため定かではありません。検索によると、アラゲハンゴンソウも地域によっては駆除対象になっているそうで、特定でなくても駆除されたのか…? その辺は分かりません。

いずれにしても、私は「特定」と指定して駆除するのは良いとしても、その足元に何が生えているのかを確認しなかったと思われる、大雑把な工事が、不思議です。近所の土手のネズミムギは特定されていないせいで、ネズミムギだけが大量繁殖していても、それは良いというものも、不思議です。

外来種問題はやっぱりだと思います。確かに、ネズミムギはとってもやっかいで、刈り取っても、刈り取っても、生えてきますし、今のところ勝っているのは数本のアザミとノギク・ヒガンバナくらいです。ほか、クルマバナ・カワラナデシコ・ウツボグサなどは、競争に負けて生き残れないようです。

陣取りゲームのつもりで、少しずつでもネズミムギではなく、他の植物色々が生えてこないかなあ…と家の前の土手で散歩、観察がてら遊んでおります。イネ科のアレルギーがあるため、花が咲くと毎年少々困っています。

川島町付近に行かれることがありましたら、ぜひ、観察してみてください。山川町のバンブーパーク付近の土手にもカワラナデシコが咲いている所があります。近所の土手に比べると、色々な植物が生えていて、楽しい土手です。石井町の河川防災ステーション三郎広場近くの土手も、外来種の花(黄色と白の二種 名前は忘れましたが)が一面に咲いていますが、アザミやコバンソウなど他の植物もいっぱいあって、楽しい土手でした。(数年前のことで現在はどうなっているかわかりません)

土手の話を国交省の方々とお話すると、一番は防災ですから…ということで、植物のことは後回しのような雰囲気です。ですから、おそらく外来種とか在来種などの知識は必要ないのかもしれないと思ったことでした。

■編集後記

ビオトープに関するお役立ち情報はもとより、皆様の活動やお仕事、日常生活を通じて見たり感じたりしたこと、身近な自然の春夏秋冬や喜怒哀楽のご寄稿をお待ちしております。ふるってご参加ください! (編集局)

[E-mail : kanv@nifty.com URL : <http://biotopetokushima.yu-yake.com>]